

大韓民国国家記録院 Nara 記録館見学記

中島康比古
国立公文書館

1. はじめに

2008年4月、大韓民国国家記録院はソウル近郊のキョンギド・ソンナム市に、Nara 記録館をオープンさせた。Nara (ナラ) とは、韓国語で「国」のこと。したがって、Nara 記録館とは、「国家記録館」という意味である。2002年7月に記録保存施設整備に関する基本計画が策定され、2004年12月着工、2007年12月に建設工事が完了し、2008年4月に正式オープンとなった。



正門前から見る Nara 記録館

2. 施設概要

Nara 記録館は、地上7階・地下3階、建築規模は62,240㎡の建物である。書庫は、書架延長が約214km、約400万冊の収蔵が可能である。総工費は、1,206億ウォン（建築費：1,065億ウォン、設備費：141億ウォン）。

ソンナム市は、韓国の人口の約40%が居住するソウル近郊に位置する。高速道路を利用してソウル市中心部から所要時間30分ほどの距離であるが、現在ソウルに直結する地下鉄の建設が進められており、利用者がアクセスしやすいロケーションに

ある。

また、屋上ルーフガーデンや中庭、さらに、ジム施設を設けるなど職員にも優しい環境を整えている。建物は、正門から見て左側に職員の働く現場である事務棟、中央に資料を保存する書庫棟、その右に、一般の来館者が利用する展示・閲覧・教育棟を、それぞれ一定の間隔を開けて配置し、書庫の環境を保護する建築上の配慮が施されている。フロアや各フロア内の事務・作業室は業務フローに合わせて配置されている。

資料の保存への配慮の面では、書庫については、マッシュルーム構造とし、毒性のないエポキシ・レジンで床をコーティングしているほか、紫外線カット型の蛍光灯を設置して光による資料の劣化を抑制している。防火設備としては、書庫にはイナジェンガス消化システムを、事務室及び閲覧室にはスプリンクラーを設置している。建物全体は、外界の温湿度、光の影響を最小限にしているだけでなく、耐爆性の高い構造としている。所蔵資料の所在管理のために RFID システムを導入している。



「国家記録院へようこそ！」の文字

3. 国家記録の「宝石箱」

Nara 記録館を訪れた私たちの目に最初に飛び込んできたのは、小高い丘陵を背にして立つガラス張りの巨大な建物である。貴重な国家記録を保存する「宝石箱」のイメージをモチーフにした建築物であるとのことである。丘陵地帯が「宝石箱」を優しく護っているように見える。天気の良い昼間に太陽の光を浴びてガラス張りの建物が煌めく様子は、「宝石箱」というよりも、Nara 記録館そのものが宝石であるかのような印象を来館者に与えるだろう。

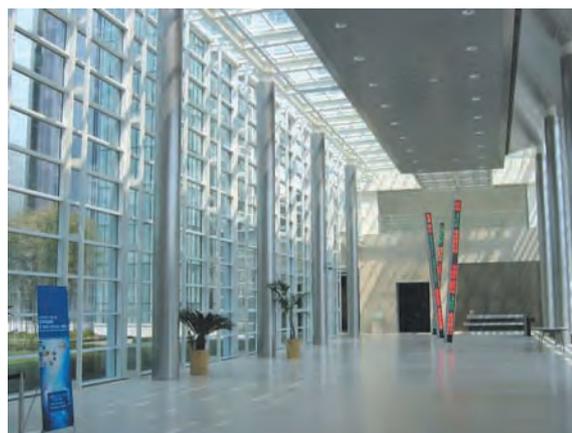


広々とした明るいエントランスホール

正面玄関から「宝石箱」の内部に入ると、まずガラス張りの広々としたエントランスホールが広がる。正面には、保存書庫棟との間を隔てる中庭が配されている。中庭の緑が人の目を和ませる。そして、中庭のおかげで、南北両面から自然光が差し込むので、ホール内はとても明るい。



エントランスホールと保存書庫棟の間に中庭



階段踊り場からエントランスホールを望む

エントランスホールから右手へ進み、展示・閲覧・教育棟へ。同棟の1階には、大統領記録展示室と国家記録展示室がある。大統領記録展示室には、歴代大統領の事績等を表す写真を含む記録類などが展示されている。

また、国家記録展示室は、朝鮮・韓国の歴史を貴重な記録などの資料やスライドショーなどによ



歴代大統領の事績を示す写真の数々



大統領記録展示室には、子ども向けパネルも



国家記録展示室にも、キッズ・ゲームが



「世界の記録機関」(中央に、当館ホームページ)



開館記念展示には、日本関係の資料も



国家記録閲覧室入口

てたどることができるだけでなく、記録を作成・活用することの意義について学ぶことの出来るスペースになっている。「世界の記録機関」と題された地図には、当館のホームページ画像も紹介されていた。なお、展示されている資料は全てレブリカである。

中庭の緑を横目にみながら、展示・閲覧・教育棟の2階へ上がると、国家記録閲覧室と大統領記録閲覧室がある。国家記録閲覧室は、資料の提供媒体別に、原本閲覧室、マイクロ閲覧室、そして、視聴覚資料閲覧室に区分されている。見学ツアーが行われた4月24日は開館直後であり、閲覧室には利用者は一人もいなかった。資料は、マイクロフィルムなどの複製資料を閲覧するのが原則であり、閲覧室の温湿度などは特にコントロールしていないとのことであった。

展示・閲覧・教育棟の4階は大講堂などの教育・研修用の会議室、5階には食堂がある。



国家記録閲覧室



国家記録閲覧室の視聴覚資料閲覧コーナー



国家記録閲覧室の原本閲覧コーナー

閲覧室は天井が高く、開放感がある。ただ、閲覧機の一人当たりの面積は、日本の公文書館や図書館より小さいようである。



大統領記録閲覧室



大講堂（後方から）



大講堂（前方から）



屋上ルーフガーデンやデッキスペースなど、「ゆとり」の演出も



食堂

4. 記録保存の最前線

事務棟には、一般の事務室のほか、記録の媒体変換や修復、複製物作成などの作業室がある。



マイクロ化作業室入口にフィルム等の展示が



マイクロ化作業室で撮影前準備作業にあたる職員



マイクロ撮影中の職員

見学ツアーで最初に案内されたのは、マイクロ化作業室である。入口には、マイクロ化作業全体の流れを説明したパネルや、マイクロフィルム、マイクロフィッシュなどが展示してある。この部屋では、解綴、ナンバリングなどの準備作業、撮影、現像、フィルム等のチェックまでが一貫体制で行われていた。



現像機が数台並んでいる。



撮影後のフィルムチェック

次に案内されたのは、オーディオ・ビジュアル資料の修復・媒体変換室である。部屋に入ると、まず目にとまったのが、オープンリール・デッキなどを初めとする録音・録画機器、銀塩フィルムカメラ、映画映写機などである。スタッフの説明では、多様な媒体や記録様式があるオーディオ・ビジュアル資料の保存の大切さを分かりやすく説くための展示スペースであるとのことであった。その展示スペースを過ぎると、さながら、オーディオ・ビジュアル関係のスタジオか編集室のような光景が広がる。何台ものモニターが設置され、数名のスタッフが、磁気テープやフィルムのチェッ

ク、写真フィルムやアナログ録音、アナログビデオのデジタル変換、変換後のオーディオ・ビジュアル資料の補整などの作業を行っていた。オーディオ・ビジュアル資料の保存に対する意気込みの強さが伝わってきた。



存在感十分なオープンリールデッキ等の展示



さまざまな機器が取り揃えられている。



音声記録の作業に携わる職員

つづいて、スキャンニング室へ。通常の大きさの文書資料のようなものから、ポスターのような大型の資料まで、資料の大きさや用途別に各種のスキャナーが用意されている。

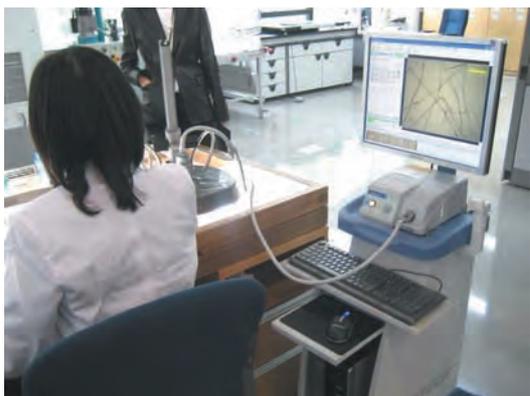


スキャンニングしたデータのチェック等作業

次に案内されたのは、今までと全く趣が変わって、韓紙（ハンシ）の修復室である。手作業による修復のためのライティングテーブルが10卓、そして、リーフキャスト機が1機あり、数名のスタッフが、修復前の資料の状態のチェックをしたり、修復作業を行ったりしている。入口近くのテーブルの上には、修復前と修復後の状態を比較できるように資料が展示されていたが、そのなかには、朝鮮総督府の土地調査簿もあった。



伝統的な韓紙の修復室



修復作業前に資料の状態チェックを

伝統的な修復作業のあとは、うってかわって、電子媒体のチェックを行っている部屋へ案内された。CD や DVD、さらにハードディスクなどのチェックが行われている。

次に、マイクロ撮影後の資料の再編綴作業と資料収納箱の作成を行っている現場を見学した。中



マイクロ撮影後の原本を扱う職員



ライティング・テーブル上で、手作業による非常に繊細な修復作業が行われていく。



資料保管箱を作成中



リーフキャスト



脱酸処理機



保存書庫 (左) 中性紙の保管箱に5冊程度の簿冊が納められている。
(右) 保管庫は、手動式のスチール製可動書架が用いられている。

性紙の収納箱を「記念品」としてプレゼントされた見学者もいた。この後、紙資料の燻蒸と脱酸を行う部屋へ案内され、それぞれの作業に使う機器の説明を受けた。

修復や媒体変換、複製物作成などについては、媒体別、記録様式別に、非常に細分化された作業が行われているのには驚かされた。また、マイクロ化作業室やオーディオ・ビジュアル資料の修復・媒体変換室のように、常設の展示を行っているのも、非常に興味深い。記録の保存や修復がどれほど大切であるか、そして、実際にどのような作業が行われているのかを見学者に見せることで、記録の管理や保存の大切さを訴える一種のデモンストレーションでもあるように思われる。

「宝石箱」の中央に位置する書庫棟内は、当然のように、記録様式別に適切な温湿度設定を行うように保存庫を分けている。例えば、フィルムの保管庫の温湿度計を見ると、温度4.2度、湿度34%と表示されていた。また、見学した範囲では、どの保存庫も、手動式のスチール製可動書架を用

いている。紙媒体の資料の場合は、書架の高さは2メートル程で、棚は6段。一定のサイズの中性紙製保存箱に5冊程度の簿冊を納めた上で、書架に排架していた。

5. 見学を終えて

「宝石箱」は、現在望み得る限りで最高と言ってもいいほどの水準で建設されている。また、媒体変換や修復などの多種多様な作業を Nara 記録館の中で実際に見ることができるようになっており、見学者は記録の保存の大切さを誰しも実感するであろう。一方、閲覧室や展示室は、所蔵記録の利用という観点から見ると、ある種の素っ気なさを感じざるを得なかった。だが、記録の閲覧については、今後はインターネット上で行うのが主流となっていくであろうし、展示についても、記録の利用よりも、「記録文化」を醸成させるための教育機能を重視しているように思われた。

【大韓民国・ナラ記録館】

施設特徴

記録管理法による国家の中核的な保存施設、記録情報センターの役割

- ・大統領記録などの記録物種類別の永久保存用書庫機能
- ・電子/非電子、視聴覚物など科学的保存処理作業機能
- ・記録情報閲覧サービス、展示館、記録管理教育場、会議場など
- ・首都圏（ソウル・京畿道）地域の文書

ナラ記録管建築概要

位置：京畿道城南市壽井 Daewang Pangyo 路 398

（始興洞 231）

総事業経費：約120.6億円

建設期間：2002 07（6年間）

面積：42,667m²

延べ面積：62,240m²（約18,827坪）

階数：地上7階・地下3階

収容能力：書架総延長210km（一般文書約4万冊・

特殊メディア約100万冊）

主要設備：恒温恒湿施設、自動制御設備、ガス消火設備、統合防犯施設

構造：鉄筋コンクリート造（耐震・防爆構造）

駐車台数：544台（地下190台・屋上354台）

書庫現況

合計 84部屋（面積25,848.00m²）

地下2階 11部屋（3,846.96m²）

写真/フィルム書庫、MF（マイクロフィルム）書庫、電子媒体書庫、CD・オーディオ・ビデオ書庫

地下1階 9部屋（2,766.96m²）

刊行物書庫、一般文書庫

地上1階 9部屋（2,632.32m²）

行政博物書庫、大統領贈答品書庫（保管庫）、

引受室書庫、脱酸/消毒書庫、整理文書庫

地上2階 9部屋（2,766.96m²）

大統領記録書庫、秘密記録書庫、一般文書庫、古・海外記録書庫、挑戦総督府書庫

地上3～7階 各9回（2,766.96m²）

一般文書庫

運営方針と人的体制

機関運営方針：記録物収集、保存、評価などを総括調整し、と国電子、視聴覚、行政博物などの特殊媒体記録物の先端管理

人的体制：総156名（記録管理部、大統領記録館、ナラ記録館）

- 記録管理部：81名

うち専門職（司書職、記録研究職、学芸研究職）36名

- 大統領記録館：56名

うち専門職（同上）21名

- ナラ記録館：19名

うち専門職（記録譲歩閲覧サービス提供及び展示館運営）4名

なお、国家記録院全体で専門職は117名

【国家記録院大田本院】

・記録管理政策・制度運営、記録情報サービス提供などの支援・活用領域を担当

・忠清道・全羅道地域の文書

【歴史記録館（釜山）】

・嶺南地区（慶尚道地域）の記録管理の拠点として、記録文化伝播及び情報サービスを提供

・大韓民国建国以前の資料

本頁のデータは5月26日～31日まで韓国を出張したアジア歴史資料センター（森川・上野・石田）の求めに応じて提供された資料をもとに作成しています。